

中古漢語における有声音の帯気性(3)

—帯気性の結論—

吉池孝一 中村雅之

前回対談の要旨

吉池：中古音の有声音(全濁音)が有気であったか無気であったかについて、前回は森博達(1991)¹の説を中心として確認しました。森氏の結論を109頁の記述により示すと次の通りです。

- ① 隋代以前から九世紀初頭まで、標準的な北方漢語の全濁音は一貫して無気音に近かったものと推定される。
- ② 唐代北方音では、全濁音はそのコエが弱化し、しかも無気音に近かった。しかし、全清音と合流してはいなかった。おそらく、全清音が [p]・[t]・[k]・[ts] のような声門閉鎖の強い完全な無気音であったのに対し、全濁音は [b]・[d]・[g]・[dʒ] のように、持続部において声門がささやきの位置をとる不完全な無声無気音に近かったのだろう。

中村：①は梵漢対音資料による結論で、②は主に日本書紀α群の漢字音による結論ですね。

吉池：①によると隋唐代を通して全濁音は無気音に近かった。②によると唐代の全濁音は不完全な無声無気音に近かった。「近かった」という微妙な表現ですが、全清音が声門閉鎖を伴う無声無気であるのに対して、全濁音の方は声門が開いたままの(=ささやきの位置をとる)無声音ということですから、破裂の瞬間に多少の息は出ているのでしょう。

中村：これに対して我々の考えは、全濁音は7世紀まで有声有気音(気音は次清音より弱い)であったということでは一致しました。しかし8世紀初頭(日本書紀α群の漢語)とそれ以降については意見を異にしましたね。

吉池：8世紀初頭(日本書紀α群の漢語。720年)の漢人の“話し手の脳裏に実在する言葉音を認識する習慣の型(音韻観念。{}で表記する)”としての全濁音をどのように認識していたか。私は、有声有気音(気音は次清音より弱い)であったと想定しました。その後清音化が進み音韻観念としても清音となると、平声では気音は強まり次清音と変わらなくなった。一方仄声では気音は弱まり全清音と変わらなくなったと想定しました。

中村：私は、8世紀初頭(日本書紀α群の漢語)の漢人の音韻観念で既に全濁音は無声とな

¹ 森博達(1991)『古代の音韻と日本書紀の成立』(大修館)。

っており、平声では無声有気音、仄声では無声無気音となっていたと考えます。諸氏の説を7世紀→8世紀初頭→9世紀としてまとめてみませんか。

諸氏の音価の変遷

吉池：次のようなことでしょうか。気音の強弱を便宜的に、強は **th, dh**、弱は **d^h** のように表記することにします。t と d のみを例示します。

		7世紀	→	8世紀初頭	→	9世紀以降
Karlgren	全清	t		t		t
	全濁平声	dh		dh		th
	仄声	dh		dh (→d)		t
	次清	th		th		th
Maspéro	全清	t		t		t
	全濁平声	d		dh		th
	仄声	d		dh		t
	次清	th		th		th
森博達	全清	t		t		t
	全濁平声	d		ḏ		th
	仄声	d		ḏ		t
	次清	th		th		th
吉池	全清	t		t		t
	全濁平声	d ^h		d ^h		th
	仄声	d ^h		d ^h		t
	次清	th		th		th
中村	全清	t		t		t
	全濁平声	d ^h		th		th
	仄声	d ^h (→d)		t		t
	次清	th		th		th

この表には実は音声と音韻観念（話し手の脳裏にある言葉音を認識する習慣の型）が混在しているのですが、それについては個々の検討で触れたいと思います。

各説の検討

中村：まず Karlgren 説ですが、実際には 7 世紀と 8 世紀を分けてはいませんし、全濁音の仄声が有気から無気変わった時期についての説明もありません。我々は当初、全濁音が有気音であるという Karlgren 説を支持する立場だったのですが、厳密に見ると気音の量については違いがあるようですね。

吉池：李榮氏の指摘にあったように²、Karlgren 氏は漢語の全濁音を梵語の有声有気と同様の強い気音を伴うものと考えていたようです。しかし、それだと梵語の漢字音訳において、有声有気音にのみ「重音」のような注記がなされる理由が説明できません。やはり漢語の全濁音は梵語に比べて気音の弱い音であったと考えるべきです。

中村：Maspéro 氏はまさにその梵漢対音によって、漢語の全濁音が無気音であるという論を展開したのですが、梵語の有声有気音を表す音訳漢字に「重音」などの注記がなされることは漢語の全濁音が強い気音を持っていなかったことの根拠にはなっても、無気音であったことの証明にはなりません。

吉池：Maspéro 説には二つ問題があります。一つは森博達氏が示したように、8 世紀以降においても梵語の有声有気音を表す音訳漢字にはしばしば「重」「重声」などの注記が見られるということです。つまり、唐代に入ってからでも全濁音が強い気音を伴うようになったとは考えにくい。もう一つは、音韻変化の方向として $d > dh$ というのが自然ではないということです。有気音から無気音になる変化はいろいろな言語に見られますが、無気音から有気音への変化はきわめてまれです。

中村：森氏の説はどうでしょうか。

吉池：森博達(1991)は、18 頁で「全濁音は中古音では有声無気音であったが、唐代北方音では、「無声化」が進行していた。」とし、中古音で全濁音は無気音であったことを明言しています。引き続き「唐代北方音において、「無声化」した全濁音の気音要素がその有無・強弱の点でどのような状態にあったのか、まだ定説はない。私は気音要素がたとえ存在したとしても、少なくとも次清音ほど強くはなかったと推測する。」とします。これは有声無気音であった全濁音が、唐代北方にける無声化の進行とともに、後発の要素として気音を伴うようになった可能性に言及したものです。この記述は、102～103 頁に「それでは、唐代北方音

² 李榮(1952)『切韻音系』(語言學專刊 第四種)北京：中國科學院。

“要是群母本來是送氣濁音，像高本漢所說的，‘在 g 除阻後有一種強的濁氣流，就是完全跟梵文的音素 gh[gh]相似，’(音韻學 254，原文 358。)何以不用迦來對 gha，反而用來對 ga，另外造一個雙料的 g'ya 【迦何——對談者補】去對 gha？這實在是高氏送氣說最大的弱點。”(114 頁)

における全濁音の気音の強弱の程度はどのようであったのだろうか。この問題について、平山久雄氏「中古漢語の音韻」は、かつて有声無気音であった全濁音が有気音に変化することによって、持続部（閉鎖部）無声音化の傾向があらわれてきたという（143～144・161頁）。とある平山氏や Maspéro 氏の有気音化説が念頭にあってのものでしょう。ただし、平山氏らが（平声において）有声無気音＞有声有気音＞無声有気音という変化を想定するのに対して、森氏は有声無気音＞ほぼ無声無気音＞無声有気音という流れを考えているようです。われわれは、全濁音は中古音の初期からすでから有声有気（気音は次清音より弱い）であったとするわけですから、唐代に有気音化したとする気音とは、同じ気音であっても考え方が異なるものです。

中村：ところで森氏の8世紀初頭の全濁音は d とありますが、これは音声であり、われわれが音韻観念とするものとは異なります。

音声と音韻観念

吉池：森博達(1991)の102頁で「全濁音はコエが弱化していたが、八～九世紀の交になっても、まだ完全に無声化して全清音や次清音に合流してはいなかったものと、私は推測する。そのことは『慧琳音義』(七八七～八〇七年撰述)の反切からも窺われる。「慧琳音義」には、上声全濁＞去声という、唐代北方音の声調変化が反映している(周法高氏「玄應反切考」参照)。しかし、その場合にも、反切の上で全濁音が清音との混同をまったく起していないのである。つまり、全濁音は無声音に近づいていたとはいえ、依然、全清音や次清音とは合流せず、三者鼎立の状況にあったのである。このことは、次に紹介する梵文字母の漢字対訳例からも明らかである。」と述べ、全濁音と全清音と次清音の三者が鼎立していたとします。これは全濁音のコエが弱まり音声としては $[d]$ のような状態であったとしても、明瞭に全濁音の区別を保っていたわけですから、話し手の脳裏に実在する発音の習慣の型(音韻観念)は有声音 $\{d^h\}$ であったとして良いのではないのでしょうか。

中村：表において気音の強弱を th と d^h で表記しますが、このような差はどうして起こるのか、音韻観念として認めることができるのかという点はいかがでしょう。

吉池： d^h の音声は $[d^h]$ ですが、有声音と有気音に必要な発音の労力は両者ともに大きいいため、気音の方が次清音 th よりも弱まっていると考えます。話者の音韻観念において気音の強弱はどの様であるかということですが、私は気音の強弱を意図しているとは考えません。音韻観念としては $\{d^h\}$ と $\{t^h\}$ で良いと思います。

中村：そうですね。私も音韻観念として強弱二種の気音を設けるのは困難だと思います。とすると、森氏が想定した「唐代北方音では、全濁音はそのコエが弱化し、しかも無気音に近

かった」とか、「全濁音は [b̥]・[d̥]・[g̥]・[d͡ʒ̥] のように、持続部において声門がささやきの位置をとる不完全な無声無気音に近かった」というのは、音韻観念としてはどのように解釈すべきでしょうか。

吉池：森氏の想定は音声を記述したのですが、私の立場からその音声を見ると全濁音の音韻観念は{d}であったように映ります。

中村：そもそも音韻観念という概念がないのかも知れません。我々は音韻史とか音韻変化を考える際には、プラハ学派的な音韻論では役に立たず、有坂秀世氏の提唱した音韻観念こそが肝心だと考えていますから、音韻観念を用いない議論にはもどかしいものを感じます。

吉池：この際ですから、音韻観念について少し確認しておきましょう。いまプラハ学派的な音韻論が音韻史の研究に役立たないという話が出ましたが、具体例を挙げてもらえますか。

中村：たとえば、現代日本語のハ行では「ハ」の子音が [h]、「フ」の子音が [ɸ] ですが、プラハ学派的な音韻論では/h/という一つの音素と解釈されます。母音によって補い合っていて意味的な対立がないからです。「ファ」は/hwa/になるでしょう。しかし、そのような理論では日本語音韻史の重要なテーマであるハ行の音韻変化は研究できません。どこまでさかのぼっても対立はないので日本語ではハ行の音韻変化がなかったことになってしまいます。「ハ」の場合、[ɸa] > [ha] の変化は江戸時代に起こったとされていますが、この場合重要なことは音韻観念として {ɸa} なのか {ha} なのかということです。音韻観念の変化こそが音韻変化になる訳です。音韻観念とは、話者がある音として発音している‘つもり’の音で、有坂秀世氏の表現を借りれば「目的観念」です。

吉池：そのことを意識して森氏の説にもどると、「不完全な無声無気音に近かった」という全濁音の音韻観念が何かということが改めて問題になります。「不完全な無声無気」、つまり声門の閉鎖を伴わない無声音を音韻観念として設定するのは不可能ではないにせよ、かなり難しいのではないのでしょうか。全濁音と次清音がともに声門の閉鎖を伴わない無声音で、ただ息の量だけが違うとすると、その差は微妙です。私は8世紀初頭の全濁音は音韻観念としては {d^h} で、音声的には [d^h] ~ [t^h] ~ [d̥] として実現したとする方がよいと思います。

中村：私の考えは吉池さんに近いのですが、違いはそれを想定する時期です。吉池さんが8世紀初頭に想定した状況を私は7世紀の段階に繰り上げたいのです。そして8世紀初頭には全濁音の音韻観念はすでに無声であり、平声 {th}、仄声 {t} になっていたのではないかと思います。（この場合、有気音の表記は {th} でも {t^h} でもよい。）ただし声調の調値で

清音とは区別があったために、カテゴリーとしては独立していたという考えです。

吉池：カテゴリーとして独立していたというのは声調との関係でしょうか。

中村：全濁音平声が {th+陽調}、全濁音仄声が {t+陽調} ということです。全清音は {t+陰調}、次清音は {th+陰調} です。

吉池：全濁音が音韻観念としてカテゴリーを保存するとして、声調の違いによるか、それとも有声性の保持によるか、7世紀から8世紀初頭は音韻観念が変化する過渡期なのでしょう。おそらく北方漢語といえども個人や団体によって音韻観念は異なっていたと考えます。この時期を過渡期と想定すると、私の考えと中村さんの考えに大きな違いはないように思うのですがいかがでしょうか。

中村：そうですね。8世紀初頭にこだわるのは日本書紀α群の仮名において日本語の清音に漢語全清音字と全濁音字の双方が用いられるという状況があるからですが、これには当時の日本語の音声の吟味も必要になり、少し本題から外れますから、7世紀～8世紀を過渡期として捉えるのが無難かも知れません。

吉池：問題は全濁音の気音の有無です。Karlgren氏以外の研究者の考え方は、小さな違いは捨象するとして、全濁音平声で有声無気音>有声有気音>無声有気音とするものです。しかし、無気音であったものが、労力の大きな有気音になるという不都合を、敢えて認めるような根拠はないというのが我々の立場です。音変化の流れにおいて労力の増大という不都合を避けるために、全濁音は中古音以前から有声有気音であったとして良いのではないのでしょうか。

中村：そうすると、以前の対談で我々が基本的に支持した Karlgren 氏の説とも符合します。Karlgren 氏の説は、上古音の有声破裂音・破擦音においては有気音と無気音の対立があり、有気音は中古音の全濁音になり、無気音は中古音の喻母や禪母などになったというものでした。

吉池：我々の結論は Karlgren 説をほぼ追認する結果になったということですね。Karlgren 説の有効性を再確認できたところで今回の対談は終了としましょう。